

スコットランド,

スカイ島のビートと溶岩

ビートは泥炭とも呼ばれ、寒冷多湿気候下の沼沢地・湖などに生育していた草本、樹木、藻類、苔類などが嫌気性環境下で堆積し、生化学的分解を受けたものである。ここスカイ島北部のものは草本が主体の草炭系である。

Bruan MUPPHY (1978)*に拠れば、ビートは「スコッチの魂」である。スカイ島にはビートの香りが強いモルトウイスキー、Taliskerがある。

ウイスキーは大麦を水に漬けて発芽させ、それをビートの直火で乾燥させ、乾燥した麦芽（モルトという）に水を加えて糖化し発酵させ、出来た薄いビールの様な液を巨大な日本のかぶと釜に似た蒸留器で蒸留する。蒸留は繰り返し行なわれ、中溜の良いところがモルトウイスキーとなる。その独特のスモーク臭は乾燥時のビートから得られる。

* The world book of whiskey. William Collins Sons & Co., Ltd., London, 192 p.

(写真と文：北海道大学 理学部 石原舜三)

1. (右) ビートは上方に成長するため、下方ほど腐食が進み色が黒い。その採掘は平野部では機械掘り、地形が複雑な山間部では大きな平スコップを使って人力で掘られる。この作業は大変重労働である。

2. (下) スカイ島北部のビート採掘遠景。スコットランドは、山地や島からなる北部のハイランド、平野が多い南部のローランドからなる。スカイ島は写真のごとくハイランドの特徴を有する。





3. (上) ビートはその90%が水分と言われ、野積みによって約1年かけて乾燥させる。



4. (左) 乾燥ビートのクローズアップ。原繊維が大量に残っていることに注目。

5. (下) スカイ島と本土を結ぶフェリー船。

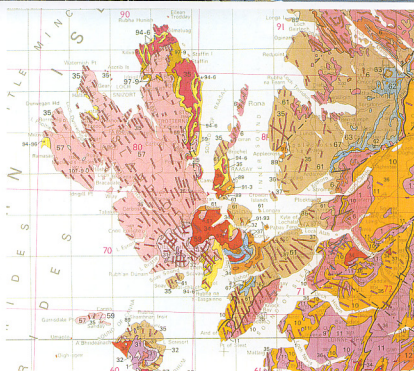




6. (上) スカイ島北東部の第三紀玄武岩露頭。柱状節理の発達が著しい。

7. (右) スカイ島の地質図
(Geol. Map of U.K., 3rd ed., 1979, 原図は62.5万分の1スケール、本図の左右が100 kmである)

スカイ島には南東部に残存する先カンブリア紀最末期の片麻岩(1), 砂岩(61), 古生代石灰岩(67)などを覆って、北西方に第三紀玄武岩類(黒字57, 35)が広く分布し、その間に円形、環状に斑れい岩類(32), 花崗岩・閃長岩類(34)の貫入も見られる。





8. (上) 緑の牧草地で全島が覆われるスカイ島北西部の風景。玄武岩（口絵7の地質記号35）のため、海浜は黒い。

9. (下) スカイ島の中心地、ポートルーの町並み。デボン紀のスレート葺きの屋根が美しい。

